

BankARTLifeV

韓国と横浜の
アーティスト交流プログラム

The Artist Exchange Program
K O R E A Y O K O H A M A

ソウル
ソウル市立美術
ソウル文化財団

インチョン/仁川
仁川文化財団

光州
光州市立美術館

プサン/釜山
釜山文化財団

横浜
BankART1929

韓国 ▼ 横浜
横浜 ▼ 韓国

Jung Yun-sun / Jang Taewon / Noh Gihun / Kim Seola / Choi Soonim
黒田大祐 / 蔵真墨 / 中川達彦 / 下西進 / 太田信吾

続・朝鮮通信使2017

横浜・韓国アーティスト交流プログラム

BankART LifeV～観光 会場:BankART Studio NYK ほか 2017年8月4日(金)～11月5日(日) [休場日:第2・第4木曜] 10:00～19:00 (10/27-29, 11/2-4は21:30まで)
ヨコハマトリエンナーレ連携セット券 (BankART Studio NYK にて会期中有効のパスポートに引き換えます): 一般 2,400円、大学・専門学校生 1,800円、高校生 1,400円、中学生以下:無料
(BankART LifeV 単体パスポート1,000円)

主催:BankART1929 共催:横浜市文化観光局 助成:芸術文化振興基金

続・朝鮮通信使2017 / Seque : Korean Envoys 2017

横浜・韓国アーティスト交流プログラム

The Artist Exchange Program YOKOHAMA & KOREA

2010年にスタートした続・朝鮮通信使。人に会う、地域を訪ねる、パレードを行う、コンサートを開く、シンポジウムを開催する等、様々な活動を通じて新しい交流のネットワークを構築してきている。2017年は、韓国の重要な施設や組織と連携しながら、AIRのプログラムを行っている。

"Sequel : Korean Envoys" started from 2010. We have been building a new exchange network through various activities, such as meeting people, visiting communities, conducting parades, holding concerts, holding symposiums and so on. In 2017, we are conducting AIR program in cooperation with important facilities and organizations in Korea.

釜山文化財団

ホンティアートセンター

Busan Cultural Foundation Hongti Art Center



釜山→横浜

Jung Yun-sun (ジョン・ユンソン)

滞在期間:6/18~9/17

Open Studio 8/4~9/6

1976年生まれ。インスタレーション作家。ホンティアートセンター(韓国釜山)5期入居作家。台北アーティストビレッジ、タウトゥアーティストレジデンスプログラム(ベルリン、ドイツ)ほか、フランス、スペインなどでレジデンスプログラムに参加し、現地で作品を制作。主な個展に、「ホンティ、その欲望-循環の中の都市」ホンティアートセンター(2017)、「コモントピア」空間力/釜山(2016)。釜山市立美術館、益山(イクサン)芸術の殿堂などでグループ展に参加多数。既存のゲームをもとに、滞在先のコミュニティの人々と交流、リサーチを繰り返す中でゲームの新たなストーリーを展開していく。



ソウル文化財団

クムチョンアートスペース

Seoul Foundation for Arts and Culture Seoul Art Space Geumcheon

現在調整中



横浜→釜山

蔵 真墨

滞在期間:7/1~9/30

1975年富山県生まれ。98年同志社大学英文学科卒。2001年東京ビジュアルアーツ写真学科中退。2010年さがみはら写真新人奨励賞受賞。主な個展に2002~03年「love machine」シリーズ、2004~11年「蔵のお伊勢参り」シリーズなど。写真集に「kura」「蔵のお伊勢参り」「氷見」(ともに蒼穹舎)、「Men are Beautiful」(Urgent Press)。



ソウル市立美術館

ナンジレジデンス

Seoul Museum of Art SeMA Nanji residency



ソウル→横浜

Jang Taewon (ジャン・テウォン)

滞在期間:7/5~9/30

Open Studio 8/4~9/6

1976年韓国ソウル生まれ。2006年アメリカ、NYのコロンビア大学大学院芸術学部を卒業後、現在は韓国ソウルとニューヨークをベースに活動している。主に大型カメラを使った写真作品を制作。アメリカンフォトグラフィー31(2015年/アメリカ)、ILWOO フォトグラフィックアワード(2010年/韓国)等受賞歴多数。韓国国立現代美術館や韓国写真美術館、ソウル市立美術館等で個展、グループ展を開催。主な写真集に「Stained Ground」ドイツ Hatje Cantz、「Black Middy」韓国 IANBOOKS など。



横浜→ソウル

太田信吾

滞在期間:7/11~10/11

映画監督、俳優。1985年生まれ。長野県出身、横浜在住。早稲田大学の卒業制作として引きこもりをテーマに製作したドキュメンタリー『卒業』がイメージフォーラムフェスティバル2010優秀賞・観客賞を受賞。友人の自殺と真正面から向かい合い、7年間の制作期間を経て完成した『わたしたちに許された特別な時間の終わり』が山形国際ドキュメンタリー映画祭2013アジア千波万波部門に選出。同作はニッポンコネクション(ドイツ)をはじめ、海外映画祭からも招聘が続いている。また、俳優として「チェルフィッチュ」や「劇団、本谷有希子」に出演するなど、舞台・映像を横断して活動している。



仁川文化財団

仁川アートプラットフォーム

Incheon Foundation for Arts & Culture Incheon Art Platform



仁川→横浜

Noh Gihun (ノ・ギフン)

滞在期間:8/15~11/15

1985年亀尾市生まれ。ソウル在住。2012年、韓国中央大学写真学科修了。今、ここをテーマに、ドキュメンタリーの手法に基づき、写真、パフォーマンス、インスタレーションなどを制作。過去から生まれた地理的環境に興味を持ち、「現在の状況は過去に由来する」という前提から、現在を取り巻く過去の影を撮影する。例えば、政府の都市計画(亀尾市)、ソウル-仁川線の有効性、日本の植民地時代に建設された最初の鉄道(1号線)、特定の経済不能地区(ブラック・ナイト)に属するホームレスの人々の社会的地位、時代が変わっても永遠に空間として存在する歴史的な広場の不変性(Mise-en-Scène)など、過去と密接に関係している現在の空間を撮影していく。



横浜→仁川

黒田大祐

滞在期間:6/8~8/22

1982年京都生まれ。広島在住。広島市立大学大学院博士後期課程修了(彫刻)。主な展覧会に「対馬アートファンタジア」(2011-2017)、「瀬戸内国際芸術祭2016」等がある。2014年は「Bankart Life IV」に参加。約1ヶ月横浜に滞在し作品制作。主に彫刻やインスタレーションを制作している。



光州市立美術館

GMAレジデンス

Gwangju Museum of Art

Gwangju international residency program



光州→横浜

Kim Seola (キム・セオラ)

滞在期間:9/18~12/15

1983年韓国麗水市生まれ。2001-06年、忠南大学で絵画を学んだのち、2009-11年、インドのパロダ大学美術学部で絵画を学ぶ。主な個展に「私たちは塵を這う」Mugaksa Lotus Gallery/光州(2016)、「記憶の触覚」Scholz & Jung Gallery/光州(2015)、「Momentary Sonorant」Sakshi Gallery/ムンバイ/インド(2013)。韓国、インド国内でグループ展に多数参加。



Choi Soonim (チェ・スンイム)

滞在期間:9/18~12/15

1973年、韓国光州生まれ。2016年、国立全南(チョンナム)大学校芸術大学彫刻科修了。主な個展に、「夢を見る」(光州、ヤンニム美術館/2017)、「夢を生きる」(ソウル、ヒスギャラリー/2017)、主なグループ展に「2+2 北海道・光州美術交流展2017」(札幌、ギャラリー レタラ/2017)、ソウルアフォーダブル国際アートフェア(ソウル、DDP=東大門デザインプラザ/2016)、第11回光州ビエンナーレ特別展(光州、ACC=アジア文化センター/2016)など。



横浜→光州

中川達彦

滞在期間:8/23~10/22

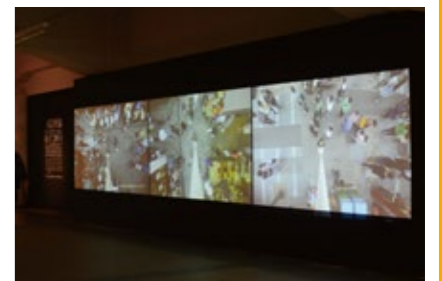
1961年大阪生まれ。1986年頃からPHスタジオのメンバーとして活動し様々なアートプロジェクトに携わる。またこの頃からアーティストの作品の撮影など写真家としても活動する。2010年頃からBankART1929のオフィシャルカメラマンとして、数々の記録写真を担当する。2012~14年ハンマーヘッドスタジオ(横浜)を拠点に制作活動及び発表を行う。2015年~宇徳ヨシカイ(横浜)に拠点を移し現在に至る。



下西 進

滞在期間:8/23~10/30

1977年広島市生まれ。2002年、武蔵野美術大学大学院修了。2015年、東京芸術大学大学院博士後期課程 先端芸術表現領域修了。自分が写り込み、様々な都市を見下ろして撮影した写真作品、バルーンにカメラを取り付け俯瞰撮影した映像作品、生放送のTV番組にゲリラ的に現れてテレビカメラを写す作品などを制作している。主なグループ展に「アジアの坩堝」福岡アジア美術館交流ギャラリー(2015)、「清里フォトアートミュージアム 開館 20周年記念展」東京都写真美術館(2014)、主な個展に「another lens」JR東日本 上野駅構内(2015)、「I'm On Earth」第7回恵比寿映像祭-地域連携プログラム(2015)など。



続・朝鮮通信使「旅する街～日韓交流の新しい可能性」

江戸幕府が「よしみ(信)をかわず(通)」の意で、二百数十年間、招聘し続けた朝鮮半島からの500人規模の文化使節団『朝鮮通信使』。この『朝鮮通信使』を今日の日韓の新しい交流プロジェクトとして展開しているのが『続・朝鮮通信使』だ。

なぜ朝鮮通信使に興味をもったか？

私たちが『朝鮮通信使』に興味をもった理由のひとつは、日本と朝鮮半島という国家間の外交プログラムが、地方都市のホスピタリティのリレーで支えられていた点だ。各都市(各藩)が人的・文化的な財産を総動員し、独自の方法で異国の客人を迎え入れ、信(よしみ)を通(かわす)。このことは既に言及されているように、江戸時代中期以降は中央集権的な国家ではなく、地方自治の連合政権、都市の時代だったという史実を浮上させる。実際20日間ばかりの2010年の旅でも、「独自性のある豊かな街の連鎖」を垣間みることができた。

もうひとつの理由は、韓国の様々な都市の人たちが、BankARTを訪ねてくれたことだ。横浜市が推進する創造都市構想プロジェクトの視察が主な目的だが、年間10を超えるチームが毎年訪ねてくれた。日本国内の各都市も同様で、歴史的建造物を活用して何かを計画をしている自治体は、必ずといっていいほどBankARTを訪ねてこられた。こんな状況の下、こちらが何も反応しないわけにはいけない、訪ね返しの旅を是非行ないたいと思いはじめた。これが『続・朝鮮通信使』をはじめめる直接的なきっかけだ。そしてまたこれはBankART事業が標榜してきた「他都市及び国際的なネットワークの構築」に正に合致するテーマだったのだ。

四国遍路

このプロジェクトのヒントになることが、今から1300年位前に、日本列島のひとつの島、「四国」で始まっている。それは「四国遍路」。もともとは空海という真言宗を開祖した偉いお坊さんが修行した足跡を、弟子達が訪ね歩いたことに起を発するが、江戸時代初期(約400年前)には、民衆も四国88カ所のお寺の遍路を始め、「訪ね歩きなさい、そうすると不幸から開放されますよ」というような概念が生まれてくる。

真言宗の教典は難しく、一般の人が理解できるようなものではないが、お寺を巡るということは、ひとつの旅ですから、今でいう観光のような要素ははいつてくる。お寺を巡る事で、人々はその地域の風物を楽しみ、そこに住む人とふれあい、新しいネットワークが育まれていく。千数百キロにも及ぶ長い旅路なので、当然、宿が必要になる。お金の無い人に対して、自分の家を無償で提供する人があらわれる。お金のもっている人に対しては、立派な旅館が道中に準備される。食べものについても同じようなことがおこる。それはお寺とお寺の道程の間に、地域の人が協力しながら飲食を備えてくれるという信じられない慣習だ。一方、旅する人のためのお土産物屋やレストランを開く人もいる。ファッション等でも同じ現象がおこる。このように、もともとは修行として始まったものが、それを巡る人をきっかけに『旅する街＝トラベリングシティ』とでもいえるようなネットワーク(街)が、生成してくるのだ。

「四国遍路」は1,300年の時を超え、今でも年間数十万の人々が四国を訪れ、四国という閉じた島の経済を外部から支える仕組みにもなっている。この「四国遍路」まさに「文化観光」は、高齢化を迎えた日本に様々なヒントを与えてくれる。「知を楽しむ」「風物を楽しむ」「健康を育む」「共有する」という、これからの社会にとって最も重要な要素が全て含まれているとって過言ではない。「朝鮮通信使」も同様。もともとは外交の、しかも最初は秀吉時代の不幸な関係を緩和するためのものだったが、次第に「文化交流」の様相を帯びてくる。人が幾度も同じ道を往来するというのは、まさに物や風物が重なり、文化が重なり、心が重なっていくことなのだ。

続・朝鮮通信使の行方

さてこのプロジェクト、どこまで続くのか？これからどの方向に向かうか。それは今現在ではわからない。少なくとも幾度も往来することだけは続けたいと思う。そしてそう遠くない将来、この往来の中から「四国遍路」のような時代を超える『旅する街＝トラベリングシティ』が生まれてくることを願いたい。

